

飲酒が及ぼす服薬への影響についての検討 ～患者意識調査と日本人におけるアルコール薬理の特徴をふまえて～

ホーム調剤薬局 / 高橋 郁乃 佐久間 玲子 佐藤 妙子 佐藤 尚美 山口 久美子
伊勢 由香里 田澤 涼子 倉田 紗央里 鈴木 麻結 大石 美也

【目的】 飲酒に関して適切な服薬指導を行うためには、我々がアルコールの体内動態や薬物相互作用について正しい知識を持つのはもちろんのこと、患者と医療側との認識のずれや、患者心理を知ることが重要なのではないかと考える。そこで来局患者に対し聞き取り調査を行い、この結果から飲酒に対してどのようなアプローチや服薬指導が重要であるかを検討したので報告したい。

【方法】 未成年を除いた来局患者全員に紙面での無記名アンケート調査を実施した。調査内容は 飲酒及びアルコールと薬剤の併用に対する意識 アルコールと薬剤併用時の対処状況 飲酒習慣の有無 医師の飲酒に対する指導の有無 アルコールと薬剤の併用による体調変化の発生状況とし、睡眠剤・血糖降下剤服用中の患者には 飲酒の自己申告状況 相互作用や疾病への影響についての認識 アルコール併用時の体調変化の発生状況についても調査した。

【結果】 飲酒に対する患者意識は「体に良い」と答えたのは全体で28.3%、女性で17.2%、男性で41.5%であり、女性より男性で有意に高かった。アルコールと薬剤の併用に対する患者意識は「併用は良くない」と答えたのは全体で76.4%、血糖降下剤併用群で76.3%、睡眠剤併用群では83.0%となり、睡眠剤併用群では他と比べ有意に高かった。アルコールと薬剤の併用時の対処状況は「服薬のみ」21.8%、「飲酒のみ」6.3%、「同時に飲む」5.2%、「時間をずらして飲む」57.4%であった。ずらす際の間隔は、全体と睡眠剤併用群では服薬後飲酒まで30分～60分に、血糖降下剤併用群では-30分～60分にピークを示した。睡眠剤または血糖降下剤併用群で飲酒習慣を医師などに申告していたのは80.6%であったが、その動機は、質問されたから答えた、または質問されなかったから答えなかったという回答が多かった。アルコールと薬剤を併用して体調変化を経験したことのある患者の割合は全体では0.96%であったが、睡眠剤併用群では7.08%、血糖降下剤併用群では2.22%とともに全体よりも高い割合を示した。血糖降下剤併用群でアルコール摂取時の血糖変化予想では、「上がる」が72.3%、「下がる」は8.5%にとどまった。

【まとめと考察】 患者の意識と実際の対処状況が必ずしも一致しないことがわかった。特に睡眠剤併用患者においては、アルコールと薬剤の併用による体調変化経験者の割合が全体と比べて有意に高く、不適切な対処により副作用が発現している可能性が示唆された。また血糖降下剤併用患者ではアルコールの血糖降下作用についての認識が低く、血糖を上げると認識している患者がほとんどで、飲酒から服薬までの間隔が他と比較して短い傾向を示したことから併用による低血糖発現の可能性に対する認識の低さが伺える。また、飲酒習慣の申告については医療側の聞き取りに任されている傾向が見られた。これらの問題を解決するために、積極的な飲酒習慣の聞き取りと患者への意識付けはもちろんのこと、実際にアルコールを併用する時の対処状況を聞き取り、個々の患者の認識について把握した上で、アルコールによる影響や併用時の対処についてのより具体的な服薬指導を行うことが重要である。

